

## PATENT ABSTRACTS OF JAPAN

(11) Publication number : 2002-003297  
 (43) Date of publication of application : 09.01.2002

(51) Int.CI.  
 C30B 29/18  
 H01L 27/04  
 H01L 21/822  
 H01L 39/02  
 H01L 39/22

(21) Application number : 2000-194688 (71) Applicant : FUJI ELECTRIC CO LTD  
 (22) Date of filing : 28.06.2000 (72) Inventor : KONISHI YOSHINORI

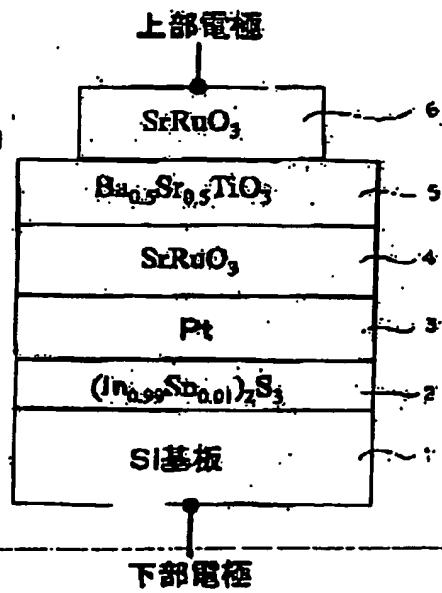
(30) Priority  
 Priority number : 2000120908 Priority date : 21.04.2000 Priority country : JP

## (54) OXIDE THIN FILM ELEMENT AND ITS PRODUCTION METHOD

## (57) Abstract:

PROBLEM TO BE SOLVED: To provide a oxide thin film element in which a functional oxide thin film consisting of a high quality oxide epitaxial layer is grown on a substrate of a Si single crystal and its production method.

SOLUTION: A oxide thin film is epitaxially grown on such a metal sulfide placed directly on the surface of a Si substrate as a buffering layer as In<sub>2</sub>S<sub>3</sub>, Al<sub>2</sub>S<sub>3</sub>, CeIn<sub>3</sub>, LaIn<sub>3</sub>, CaIn<sub>2</sub>S<sub>4</sub>, MgIn<sub>2</sub>S<sub>4</sub>, MnIn<sub>2</sub>S<sub>4</sub>, BaIn<sub>2</sub>S<sub>4</sub>, MgS, CaS, and MnS. The Si substrate can be used as a bottom electrode, when the electric conductivity is improved by doping the metal sulfide with tin. When a metal sulfide epitaxial thin film is formed directly on the Si substrate surface, preferably the sulfide be sulfur-terminated and a metal thin film of the platinum family be inserted on the buffer layer.



## LEGAL STATUS

[Date of request for examination] 23.03.2005

[Date of sending the examiner's decision of rejection]

[Kind of final disposal of application other than the examiner's decision of rejection or application converted registration]

[Date of final disposal for application]

[Patent number]

BEST AVAILABLE COPY

[Date of registration]

[Number of appeal against examiner's  
decision of rejection]

[Date of requesting appeal against  
examiner's decision of rejection]

[Date of extinction of right]

Copyright (C): 1998,2003 Japan Patent Office

**BEST AVAILABLE COPY**

(18)日本国特許庁 (JP)

(12) 公開特許公報 (A)

(11)特許出願公開番号

特開2002-3297

(P2002-3297A)

(43)公開日 平成14年1月9日(2002.1.9)

(51)Int.Cl'	類別記号	F I	データード(参考)
C 30 B 29/18		C 30 B 29/18	4 G 0 7 7
H 01 L 27/04		H 01 L 28/02	ZAAD 4 M 1 1 3
21/022		39/22	ZAAD 4 M 1 1 4
39/02	ZAA	27/04	C 5 P 0 3 8
39/22	ZAA		

審査請求 未請求 新規性の範囲 OL (全 9 頁)

(21)出願番号	特願2000-194888(P2000-194888)
(22)出願日	平成12年6月28日(2000.6.28)
(31)優先権主要番号	特願2000-120808(P2000-120808)
(32)優先日	平成12年4月21日(2000.4.21)
(33)優先権主要国	日本 (JP)

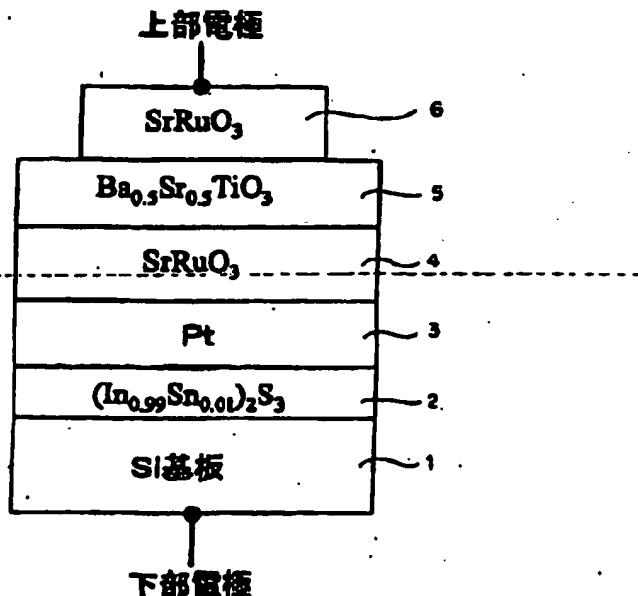
(71)出願人	000005234 富士電機株式会社 神奈川県川崎市川崎区田辺新田1番1号
(72)宛名者	小西 錠助 神奈川県川崎市川崎区田辺新田1番1号 富士電機株式会社内
(74)代理人	100088339 弁理士 植部 正治 Pターム(参考) 4G077 AA03 BB10 D411 E008 E203 EF02 4H13 AD35 AD38 CA31 4H14 AA29 5F038 AD02 AD03 AC15 AC18 EZ14 EZ15 EZ17 EZ20

(54)【発明の名称】 鋼化物薄膜素子およびその製造方法

(57)【要約】

【課題】 S I 単結晶基板を用い、その上に良質の鋼化物エピタキシャル層からなる鋼化薄膜の複数層を成長させた鋼化物薄膜素子およびその製造方法を提供する。

【解決手段】 S I 基板直上に、バッファー層として例えばT<sub>in</sub>z S<sub>1</sub>、Al<sub>1</sub>n S<sub>2</sub>、Ce<sub>1</sub>n S<sub>3</sub>、La<sub>1</sub>n S<sub>4</sub>、Ca<sub>1</sub>n S<sub>5</sub>、Mg<sub>1</sub>n S<sub>6</sub>、Mn<sub>1</sub>n S<sub>7</sub>、Ba<sub>1</sub>n S<sub>8</sub>、Mg S、Ca S、Mn S等の金属硫化物を介在させ、鋼化物薄膜をエピタキシャル成長させる。金属硫化物に銀をドープして導電性を向上させれば、S I 基板を下部電極とすることができる。S I 基板直上に硫化物のエピタキシャル薄膜を形成する際、硫黄終焼化し、また、バッファー層上に白金族の金属薄膜を押入すると良い。



BEST AVAILABLE COPY

## 【特許請求の範囲】

【請求項1】シリコン単結晶基板上に酸化物薄膜を製膜した酸化物薄膜粒子において、シリコン単結晶基板直上に金属酸化物からなるバッファー層を介在させて酸化物薄膜をエピタキシャル成長させたことを特徴とする酸化物薄膜粒子。

【請求項2】インジウム (In) を含む金属酸化物を用いることを特徴とする請求項1に記載の酸化物薄膜粒子。

【請求項3】Mを金属元素、Sを硫黄とするとき、(M<sub>1-x</sub>In<sub>x</sub>)<sub>2</sub>S型の金属硫化物であることを特徴とする請求項2に記載の酸化物薄膜粒子。

【請求項4】硫化インジウム (In<sub>2</sub>S<sub>3</sub>) を用いることを特徴とする請求項3に記載の酸化物薄膜粒子。

【請求項5】Mがアルミニウム (Al) 、セリウム (Ce) 、ランタン (La) のいずれかであることを特徴とする請求項3に記載の酸化物薄膜粒子。

【請求項6】Mがアルミニウム (Al) であり、(Al<sub>1-x</sub>In<sub>x</sub>)<sub>2</sub>S<sub>3</sub>のxが0<x<0.33であることを特徴とする請求項3に記載の酸化物薄膜粒子。

【請求項7】Mを金属元素、Sを硫黄とするとき、M<sub>1-x</sub>Si<sub>x</sub>型の金属硫化物であることを特徴とする請求項2に記載の酸化物薄膜粒子。

【請求項8】Mがカルシウム (Ca) 、マグネシウム (Mg) 、マンガン (Mn) 、バリウム (Ba) のいずれかであることを特徴とする請求項7に記載の酸化物薄膜粒子。

【請求項9】金属硫化物に銀がドープされていることを特徴とする請求項1ないし8のいずれかに記載の酸化物薄膜粒子。

【請求項10】金属酸化物が導電性であることを特徴とする請求項1ないし8のいずれかに記載の酸化物薄膜粒子。

【請求項11】硫化マグネシウム (MgS) 、硫化カルシウム (CaS) または硫化マンガン (MnS) を用いることを特徴とする請求項1に記載の酸化物薄膜粒子。

【請求項12】金属酸化物からなるバッファー層上に白金族の金属薄膜を製膜したことを特徴とする請求項1ないし11のいずれかに記載の酸化物薄膜粒子。

【請求項13】白金族の金銀がロジウム (Rh) 、イリジウム (Ir) 、パラジウム (Pd) 、白金 (Pt) のいずれかまたはこれらの合金であり、その単層膜もしくは複数層の薄膜を製膜したことを特徴とする請求項12に記載の酸化物薄膜粒子。

【請求項14】シリコン単結晶基板上に金属酸化物からなるバッファー層を介在させて酸化物薄膜をエピタキシャル成長させた酸化物薄膜粒子の製造方法において、シリコン単結晶基板表面のシリコン原子のダンギングボンドを硫黄原子で封端処理した後、金属酸化物からなるバッファー層を形成することを特徴とする酸化物薄膜粒 50

子の製造方法。

【請求項15】シリコン単結晶基板表面を清浄化後、硫黄の蒸気にさらすことを特徴とする請求項14に記載の酸化物薄膜粒子の製造方法。

【請求項16】酸化物薄膜がペロブスカイト構造の酸化物であることを特徴とする請求項1ないし13のいずれかに記載の酸化物薄膜粒子。

【発明の詳細な説明】

## 【0001】

【発明の属する技術分野】本発明は、酸化物薄膜を機能膜として利用するキャパシタ、超電導体等の酸化物薄膜粒子に関する。

## 【0002】

【従来の技術】様々な物理的特性を持つ金属酸化物が新たな材料として見直されている。それらの薄膜をシリコン (以下S1と記す) 基板上に形成すれば、特異な機能をS1デバイスに付与できる可能性があり、S1単結晶基板を用いた酸化物薄膜研究が世界中で進められている。以下、酸化物誘電体薄膜を機能膜として利用しているキャパシタを例に説明する。

【0003】酸化物単結晶の特性をS1基板上の薄膜で発現させるためには、エピタキシャルな高品質の薄膜を作製しなければならない。しかし、S1基板表面には、大気中にて数nmの厚さの自然酸化膜 (以下S1O<sub>2</sub>膜と記す) が生じており、そのS1O<sub>2</sub>膜はアモルファス形態をなしているため、良質なエピタキシャル膜を成長させるには、まず清浄なS1基板表面を露出させる必要がある。

【0004】そのプロセスとしては、通常次のような方法がおこなわれる。まず、過酸化水素溶液を使用するいわゆるRCA法を用いて、自然S1O<sub>2</sub>膜、金属不純物、パーティクル等を除去する。次に洗浄したS1基板を超高真空脱脂室に入れ、基板温度をおよそ800°C以上に加熱して、洗浄工程、製膜室搬入工程で発生するS1O<sub>2</sub>膜を酸化させて除去する [例えば、Ishizaka, A and Shiraishi, Y. ジャーナルオブエレクトロケミカルサイエンティズ, 133巻, 666頁, (1986年) 参照]。

【0005】清浄化したS1基板表面に、金属酸化膜を製膜する際にも、表面に再びS1O<sub>2</sub>膜を成長させないための工夫が必要となる。例えば、S1より酸化され易い金属の酸化物を、目的の酸化物薄膜とS1基板との間にバッファー層として、低い酸素分圧にて製膜することにより達成される。そのような金属酸化膜として、酸化セリウム (CeO<sub>2</sub>) 、酸化ジルコニア (ZrO<sub>2</sub>) 、酸化イットリウム (Y<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) 、イットリウム安定化酸化ジルコニア (YSZ) 、酸化マグネシウム (MgO) 、酸化マグネシウムアルミニウム (MgAl<sub>2</sub>O<sub>4</sub>) などがS1基板上にエピタキシャル成長可能であると報告されている (Harada, Keizo, Nakanishi, Hidemori, Itozaki, Hideo and Yazu, Shuji, ジャパンエレクトロニクス

3  
ヤーナルオブアプライドフィジックス誌, 30巻, 834-838頁.(1991年)、Inoue Tomoyasu他、同誌, 32巻, 1765-1767頁.(1993年)、Fukumoto Hiroyuki、Iwura Takeshi and Ochiai Yukio、アプライドフィジックスレターズ誌, 65巻, 360-361頁.(1990年)、Fork, D. K., Fenner, D. B., Connell, G. A. M., Phillips, J. M. and Geballe, T. H.、同誌, 57巻, 1137-1139頁.(1990年)参照)。

【0006】 但し、上記のバッファー層用金属酸化膜は、いずれも絶縁体的な電気伝導度を示すために、Si基板との目的の金属酸化物薄膜との電気的な導通は途絶えてしまう。従って、Si基板自体を下部電極として用いることはできない。最近、Si基板上にバッファー層無しで、しかもSiO<sub>2</sub>膜を生じさせずに強誘電体であるチタン酸ストロンチウム(SrTiO<sub>3</sub>、以下STOと記す)膜を直接成長させる技術が報告された【McKee, R. A., Walker, F. J. and Chisholm, M. F.、フィジカルレビュー・レターズ誌, 81巻, 3014-3017頁.(1998年)参照】。

【0007】 その方法は、プロセスが難しいという問題の他に、後工程で酸素雰囲気中の熱処理をする際、STO膜が酸素を透過し、STO膜とSi基板との間にSiO<sub>2</sub>膜を生じてしまうという難点がある。一方、バッファー層として窒化チタン(以下TiNと記す)膜を用いる方法が検索されている。TiN膜は導電性があり、代表的な強誘電体酸化物であるペロブスカイト形酸化物の平均的な格子定数(約0.4nm)に近い格子定数0.424nmの立方晶をなすことから、多くの研究がなされている。

【0008】 Si基板上に酸化物強誘電体薄膜をエピキシャル成長させる場合、まずRCA法等の方法でSi表面の自然酸化膜(SiO<sub>2</sub>)を除去し、Siの清浄表面を形成する。ところが、製膜装置内に残留炭素原子が存在すると、一旦清浄な面が形成されたSi表面に炭素原子が吸着し、最表面に炭化珪素(SiC)膜を形成し易いことが報告されている【例えば Yoshihoto M., Nagata H., Tsukahara T. and Koinuma H.、ジャパン・ジャーナルオブアプライドフィジックス誌, 29巻, L1189頁(1990年)参照】。

【0-0-0-9】 Siの清浄表面が再び炭素で汚染されないようにするには、製膜装置を十分に空焼きし、炭素源を枯らすことが必要である。そのためには基板温度が800°Cの場合、およそ1×10<sup>-6</sup>Paより高真空中に製膜装置を維持しなければならない。また、Siの洗浄工程の最後にふつ酸(HF)で洗浄し、Si表面のダングリングボンドを水素終端化することが良くおこなわれている。それにより、800°C程度の高溫にすることなく、Si表面にSiO<sub>2</sub>膜が生成されない状態をしばらく(30分程度かそれ以上)保つことができるといわれている【例えば Morita M., Ohmi T., Nagayama E., Kawakubo 50

I. M. and Sano K.、アプライドフィジックスレターズ誌, 55巻, 562頁(1990年)参照】。

【0010】 この方法は、ダングリングボンドを持った活性なSi表面を他の原子で終端化してやり、表面を安定化させていると考えられる。この様にSi表面を安定化させて、良質の薄膜を形成する試みには、Si表面のテルル(Te)終端化が試みられた報告もある【例えば 例口、中西、1990年応用物理学講演予講集, 28a-T-6参照】。他に、知京らはSi表面の酸素(A<sub>1</sub>)終端化をおこなっている。

【0011】  
【発明が解決しようとする課題】 しかしこれらの方法にも問題点が幾つかある。まず、TiN膜はその上に酸化膜を膜厚する際に十分な酸素バリアにならないことである。そのため酸素がTiN膜を通過し、Si基板表面に達すると、絶縁体であるSiO<sub>2</sub>膜を生じ、電気伝導性を損なってしまう。

【0012】 この問題に対する解決策としてYanase, Sanoらは、TiN膜の酸素バリア性を高めるためにTiNにアルミニウム(A1)を添加したTi<sub>1-x</sub>A<sub>x</sub>N膜を用いた【Yanase Naoko, Sano Kenya, Abe Kazuhiko and Kawakubo Takeshi、ジャパン・ジャーナルオブアプライドフィジックス誌, 37巻, L151-L153頁.(1998年)参照】。しかし、その論文に示されているように、Ti<sub>1-x</sub>A<sub>x</sub>N膜/Si基板界面は、原子の並びの乱れたアモルファス層をなしており、良質のエピキシャル層を成長することができなかった。その原因は、論文によるとTi<sub>1-x</sub>A<sub>x</sub>N膜とSi基板との22%を超す程大きい格子定数の相違のためとされている。

【0013】 もう一つの問題点は、Siの窒化物の生成ギブスエネルギーが、Tiの窒化物の生成ギブスエネルギーよりも小さく、Siの窒化物の方が安定なことである。298Kで比較すると、TiNの生成ギブスエネルギーが、-309.6KJ/molであるのに対し、Si<sub>3</sub>N<sub>4</sub>のそれは-642.7KJ/molである。そのため、Si基板表面が窒化されてシリコン窒化物(Si<sub>3</sub>N<sub>4</sub>)を生じ、界面にアモルファス層がてしまう。

【0014】 実はSiの窒化物の生成ギブスエネルギーは、他のほとんどの金属のそれに比べ相当に低く、Si基板上に何かの金属の窒化膜を形成しようとすると、ほとんどの場合、界面へのSi<sub>3</sub>N<sub>4</sub>の生成を回避できないと考えられる。その他のバッファー層として沸化ストロンチウム(SrF<sub>2</sub>)や沸化カルシウム(CaF<sub>2</sub>)のような沸化物を用いる試みもなされている【例えば Moon, B. K. and Ishihara, H.、マテリアルズリサーチ・セティシング・ポジウム・プロシーディング, 341巻, 113-118頁.(1994年)参照】。しかし、窒化物と同様にSiの沸化物の生成ギブスエネルギーもかなり低いために、良いバッファー層にはなりえない。

【0015】 硼化物をバッファー層に用いる場合、それ

らのS-I表面の水素終端法や硫酸終端法は適切でない。水素終端法や硫酸終端法されたS-I表面は、数百℃で水素や硫酸を放してしまうと言われている。そうすると、600℃以上の基板温度での製膜の際に、炭素のS-I表面への吸着は起こってしまうと考えられる。T-O終端法などの程度技術的に確立されているかは不明であるが、仮にS-I基板上に高温で吸着されたままであるとすると、硫化物の成長の邪魔になると考えられる。

【0016】このような状況に鑑み本発明の目的は、バッファー層/S-I基板界面にアモルファス層をなさず、導電性で、しかもバッファー層製膜後の酸素露露気中の熱処理の際にも、酸素バリアとして働いてS-I O<sub>x</sub>膜の生成を防ぐようなバッファー層を備えた金属硫化物薄膜原子およびその製造方法を提供することにある。

【0017】

【課題を解決するための手段】本発明ではバッファー層に、S-Iと格子定数が近く、S-Iよりも硫化され易い金属の硫化物を用いる。すなわち、S-I単結晶基板上に硫化物薄膜を製成した硫化物薄膜原子において、S-I単結晶基板上に、S-Iの硫化物よりも安定な金属硫化物を介在させて硫化物薄膜をエピタキシャル成長させるものとする。

【0018】S-Iの硫化物をつくる生成ギブスエネルギーは比較的低いが、それより安定な金属硫化物をバッファー層として介在させて硫化物薄膜をエピタキシャル成長させれば、硫化物薄膜がアモルファス状態とならずにエピタキシャル成長することができる。特に、硫化物としてインジウム(I<sub>n</sub>)を含む金属硫化物を用いると良い。

【0019】例えばMを金属元素、Sを硫黄とするとき、(M<sub>x</sub>I<sub>n1-x</sub>)<sub>z</sub>S<sub>3</sub>型の金属硫化物の一つである硫化インジウム(I<sub>n1</sub>S<sub>3</sub>)の生成ギブスエネルギーは-412.5kJ/molであり、S-Iの硫化物のそれ(-206.5kJ/mol)に比べて低く、安定である。また、I<sub>n1</sub>S<sub>3</sub>の結晶型は欠陥スピニル型の立方晶(Fd3m)であり、その格子定数は1.0734nmである。その半分とS-Iのそれ(0.5430nm)とは僅かに、-1.26%のミスマッチであって、エピタキシャル成長に適している。

【0020】I<sub>n1-x</sub>S<sub>3</sub>のTが原子の二重成いは二部を別の金属原子で置きかえた(M<sub>x</sub>I<sub>n1-x</sub>)<sub>z</sub>S<sub>3</sub>型の硫化物をバッファー層として用いることもできる。I<sub>n1</sub>S<sub>3</sub>は、二つの等価なI<sub>n</sub>原子を含むため結晶の対称性に関する自由度が大きく、前記の欠陥スピニル型の立方晶以外に、斜方晶、正方晶、六方晶と様々な結晶型を取りうる。単結晶シリコン基板上にエピタキシャル成長させるとときは、シリコン基板の原子配列に整合して立方晶をとると考えられるが、その薄膜成長条件が狭いことが懸念される。

【0021】(M<sub>x</sub>I<sub>n1-x</sub>)<sub>z</sub>S<sub>3</sub>型の硫化物とする

ことによって、自由度を低下させることができになり、欠陥スピニル型の立方晶が得られ易くなつて、構造的に安定で、I<sub>n1</sub>S<sub>3</sub>よりもエピタキシャル成長が起きやすいバッファー層とすることができる。特にMがアルミニウム、セシウム、ランタンのいずれかであることが良い。

【0022】シリコンより硫化物がをつくる生成ギブスエネルギーが低い、すなわち生成ギブスエネルギーが負で、その絶対値が大きく、安定な硫化物を作る元素は、

10 アルミニウム(AI)、バリウム(Ba)、ベリリウム(Ba)、カルシウム(Ca)、セリウム(Ce)、インジウム(I<sub>n</sub>)、ランタン(La)、リチウム(Li)、マグネシウム(Mg)、マンガン(Mn)、モリブデン(Mo)、ナトリウム(Na)、ストロンチウム(Sr)、タンタル(Ta)、ジルコニウム(Zr)である。

【0023】これらの元素中でI<sub>n</sub>に置き代わつて欠陥スピニル構造をとり、S-I基板の格子定数に近い化合物を作るものは、AI、CeとLaである。AI、Ceの硫化物の生成ギブスエネルギーは、それぞれ-714kJ/mol、-451.5kJ/molである。Laの硫化物の生成ギブスエネルギーは、-1000kJ/molより低いと考えられる。これらの値は、I<sub>n</sub>の硫化物の生成ギブスエネルギー-412.5kJ/molより低く、勿論、S-Iが硫化物をつくる生成ギブスエネルギー-206.5kJ/molよりもはるかに低いため、バッファー層/S-I界面において硫黄原子がS-Iの方に拡散していく可能性は低い。

【0024】S-Iより硫黄との結合エネルギーの大きい上記の元素の金属原子で、I<sub>n1</sub>S<sub>3</sub>のI<sub>n</sub>原子の一つ成いは一部を置きかえた硫化物、具体的には、硫化インジウムアルミニウム(AI<sub>x</sub>I<sub>n1-x</sub>)<sub>z</sub>S<sub>3</sub>、硫化インジウムセリウム(Ce<sub>x</sub>I<sub>n1-x</sub>)<sub>z</sub>S<sub>3</sub>、硫化インジウムランタン(La<sub>x</sub>I<sub>n1-x</sub>)<sub>z</sub>S<sub>3</sub>をバッファー層に利用する。

(AI<sub>x</sub>I<sub>n1-x</sub>)<sub>z</sub>S<sub>3</sub>、Ce<sub>x</sub>I<sub>n1-x</sub>S<sub>3</sub>、La<sub>x</sub>I<sub>n1-x</sub>S<sub>3</sub>は、I<sub>n1</sub>S<sub>3</sub>と同じ欠陥スピニル構造を持つ立方晶で、格子定数はそれぞれ、1.07426nm(x=0.22)、1.0839nm、1.0881nmであり、その半分はS-I基板の格子定数0.5341nmとの差は、それぞれ-1.1%、-0.2%、+0.2%であり、非常に小さい。このように格子定数の一致が良いことから、エピタキシャル成長したバッファー層を形成する上で有利である。

【0025】Mがアルミニウム(AI)のときは、(AI<sub>x</sub>I<sub>n1-x</sub>)<sub>z</sub>S<sub>3</sub>のxが0<x<0.33であるものとする。xの増大とともに(AI<sub>x</sub>I<sub>n1-x</sub>)<sub>z</sub>S<sub>3</sub>の格子定数は小さくなる。x>0.33であると、その格子定数の半分とS-I基板の格子定数との差が-1.5%以上になって、エピタキシャル成長が困難になる。

【0026】上に記したようにI<sub>n1</sub>S<sub>3</sub>の結晶格子は、欠陥スピニル型で格子定数は1.0724nmの立方

品である。 $(A_1: In_{1-x})_2S_3$ 、 $CaInS_3$ 、 $LaInS_3$ も同じ欠陥スピニル型の構造をもつ。本来のスピニル型格子構造の単位格子の原子配置を図3(a)に示す。一般のスピニル型分子は $AB_2O$ 、(A、Bはそれぞれ金属元素を示す)と表記され、図3(a)の単位格子は、この分子を8分子分含有している。また一般のスピニル型分子での金属元素と六価元素との原子比は3:4である。

【0027】 $In_2S_3$ の場合、A金属元素、B金属元素が同じIn元素で、酸素原子の替わりに硫黄原子が配置され、単位格子から2つと2/3個のInが抜けて、Inを21と1/3個、Sを32個含有した、InとSの元素比が2:3の構造、すなわち欠陥スピニル構造を持つ。 $(A_1: In_{1-x})_2S_3$ 、 $CaInS_3$ 、 $LaInS_3$ の場合、 $In_2S_3$ のInの一部が、それぞれA1、Ca、Laに置き換わった構造である。

【0028】 $In_2S_3$ の結晶において、どの位置にあるInが欠陥するかは不定である。また、 $(A_1: In_{1-x})_2S_3$ 、 $CaInS_3$ 、 $LaInS_3$ も同様である。従って欠陥スピニル構造は、その欠陥を有するが故にエピタキシャル成長する薄膜成長条件が決して不都合を生じることが懸念される。また、その上に酸化物を成長させる際に、欠陥を伝って酸素が深くまで浸透する可能性があり、酸素バリア性からも問題を生じる恐れがある。

【0029】そこで本発明では、バッファー層に、欠陥の無いスピニル構造の硫化物を用いることを考えた。すなわち、バッファー層をMを金属元素、Sを硫黄とするとき、 $MIn_2S_4$ 型の金属硫化物とするものとする。特にMがカルシウム(Ca)、マグネシウム(Mg)、マンガン(Mn)、バリウム(Ba)のいずれかであることが良い。

【0030】S1よりも硫化され易い金属を含むスピニル構造の $MIn_2S_4$ 型の硫化物で、しかもS1とのミスマッチが小さいものとしては、硫化インジウムカルシウム(以下CaIn<sub>2</sub>S<sub>4</sub>と記す)または硫化インジウムマグネシウム(以下MgIn<sub>2</sub>S<sub>4</sub>と記す)または硫化インジウムマンガン(以下MnIn<sub>2</sub>S<sub>4</sub>と記す)が挙げられる。

【0031】 $CaIn_2S_4$ はスピニル型の格子定数が1.0774nmの立方晶である。その格子定数の半分はS1の0.5431nmに比べ、-0.8%と大変良く一致し、 $In_2S_3$ のそれ(-1.3%)よりも良い。MgIn<sub>2</sub>S<sub>4</sub>もスピニル型の格子構造を持ち、格子定数が1.0687nmの立方晶である。その格子定数の半分はS1のそれに比べ、-1.6%であり、比較的良好。MnIn<sub>2</sub>S<sub>4</sub>もスピニル型の格子構造を持ち、格子定数が1.0694nmの立方晶である。その格子定数の半分はS1のそれに比べ、-1.5%であり、比較的良好。

【0032】 $CaIn_2S_4$ はスピニル型ではないが、 $PbCa_2S_3$ 型の斜方晶でありその格子定数は、1.084nm、0.6556nm、1.0885nmである。a軸、c軸の格子定数の半分とS1とのミスマッチは小さく、特に単位格子のa-c面の面積は、S1の2×2の格子の面積との差は0.01%より小さい。Ca、Mg、Mn、Baが硫化物をつくる生成ギブスエネルギーは、それぞれ-477.4kJ/mol、-341.8kJ/mol、-218.4kJ/mol、-456kJ/molと、それぞれS1のそれよりも低いため、バッファー層/S1界面において硫黄原子はS1の方に拡散していく可能性は低い。また、格子定数の一致が良いことからエピタキシャル成長したバッファー層を形成する上で有利である。CaIn<sub>2</sub>S<sub>4</sub>、MgIn<sub>2</sub>S<sub>4</sub>、MnIn<sub>2</sub>S<sub>4</sub>は欠陥の無いスピニル構造を有るのでエピタキシャル成長する薄膜成長条件が広くなる。工芸的には容易に高品質薄膜が得られ易くなる利点がある。

【0033】金属硫化物が導電性であると良い。これらの材料電気伝導性を有するかどうかは不明であるが、導電性であれば、S1基板を硫化物薄膜電子の電極の一部として利用することができる。金属硫化物( $MxIn_{1-x})_2S_4$ または $MIn_2S_4$ に銀をドープするものとする。

【0034】Inが銀(Sn)と周期律表において隣合わせで原子半径が似通っていることから、SnをドープしてInと置換し導電性を向上させることができ。S1基板を硫化物薄膜電子の電極の一部として利用する場合、銀をジープした導電性のバッファー層を用いることができる。他に、硫化マグネシウム(MgS)、硫化カルシウム(CaS)、硫化マンガン(MnS)を用いても良い。

【0035】MgSの生成ギブスエネルギーは-341.8kJ/molと低く、また、その格子定数は、立方晶で0.5200nmである。S1の格子定数とのミスマッチは、-4.4%である。CaSの場合、生成ギブスエネルギーは-477.8kJ/molと低く、また、その格子定数は、立方晶で0.5695nmである。S1の格子定数とのミスマッチは+4.9%である。MnSの生成ギブスエネルギーは-218.4kJ/molと低く、また、その格子定数は、立方晶で0.5224nmである。S1の格子定数とのミスマッチは、-3.8%である。

【0036】上記の硫化物はいずれも格子定数がS1のそれに近く、ミスマッチが小さいので、S1界面にアモルファス層を形成しない。そのため、それらの硫化物をバッファー層として介在させ、その上にエピタキシャル成長をさせることができとなる。また、酸化物の生成ギブスエネルギーの方が、硫化物のそれよりも低いため、酸化雰囲気中ではそれら自身が酸化を受ける。よって硫化物のバッファー層は酸素バリアーとしても作用する。

【0037】S1基板上に形成した金属硫化物からなる

9  
 パッファー層上に白金族の金属の单層膜もしくは複層膜をエピタキシャル成長させると良い。具体的には、ロジウム (Rh)、イリジウム (Ir)、パラジウム (Pd)、白金 (Pt) が適する。それらの金属は、白金族に属する貴金属でみな酸化されにくく、硫化もされにくくと考えられる。またそれらの金属は、面心立方格子の構造をとり、格子定数はそれぞれ 0.38031 nm, 0.3839 nm, 0.3890 nm, 0.3923 nm である。それらの格子定数は、Si の格子定数の  $\sqrt{1/2}$  (0.3840 nm) に大変近い。酸化物のパッファー層を Si の格子定数と近くなるように選んだ場合、酸化物とそれら金属の格子定数のマッチングを良くすることができる。よって、Si 基板上にエピタキシャル成長した酸化物パッファー層上にそれら金属薄膜をエピタキシャル成長させることができる。その直上に酸化物層を形成すれば、酸化物層の下地の界面は安定する。また、代表的なペロブスカイト型酸化物は、0.39 nm の格子定数を持つ。それに対してもこれら金属の格子定数は良いマッチングを示すので、エピタキシャル酸化物薄膜を製造することができる。

【0038】金属薄膜上に酸化物層を成長させる際、酸素を導入するために金属薄膜を越えて酸化物のパッファー層にまで酸素が達する可能性がある。しかし、酸化物のパッファー層自身が酸化され、その下の Si 基板にまでは酸素が達しないので、絶縁性の SiO<sub>2</sub> 層の発生が防がれる。また、酸化物のパッファー層が酸化され、格子が乱されても金属薄膜は既にエピタキシャル成長し、単結晶化しているので、酸化物層の結晶性に影響は及ぼさない。

【0039】シリコン単結晶基板上に金属硫化物からなるパッファー層を介在させて酸化物薄膜をエピタキシャル成長させた酸化物薄膜素子の製造方法としては、シリコン単結晶基板表面のシリコン原子のダングリングボンドを硫黄原子で終端処理した後、金属硫化物からなるパッファー層を形成するものとする。具体的な方法としては、Si 表面の清浄化をおこなった後、Si 表面を  $10^{-6} \sim 10^{-4}$  Pa 程度の硫黄の蒸気にさらすものとする。

【0040】そのようにすれば Si 表面が、硫黄で終端化され、炭素の吸着を防止できる。前に述べた RCA 法や水素終端の方法で Si 表面を形成する。引き続き、40 硫黄の蒸気が  $10^{-6} \sim 10^{-4}$  Pa 程度充満している酸化物薄膜成長槽に Si 基板を移送する。その槽に 1 分間放置すると Si 表面は、1 単原子層の硫黄原子で覆われる。その後、酸化物のパッファー層を形成する。

【0041】Si の酸化物をつくる生成ギブスエネルギーは、-206.5 kJ/mol であり、Si が炭素と結びつき炭化珪素 (以下 SiC と記す) を形成する生成ギブスエネルギーの約 -60 kJ/mol よりも低い。よって Si 表面は炭素より硫黄と結合し易い。すなわち、真空装置に置かに炭素が残っていたとしても、Si 表面はそれより 50

10 も結合力の強い硫黄と結合するため、先に述べた真空度まで製膜装置を維持する必要は無くなり、Si の蒸発する  $1 \times 10^{-6}$  Pa 程度にすれば良くなる。この圧力はおよそ 1 L (ラングミュア) と呼ばれ、ガスの吸着係数を 1 とすれば、基板表面は約 1 秒間にガス原子の單一層で覆われてしまう圧力である。よって、 $10^{-6} \sim 10^{-4}$  Pa 程度の硫黄蒸気に Si 基板を晒すことにより、1 分間程度で Si の硫黄終端が形成される。表面の Si が硫黄と結合しても、硫黄がその下の Si 原子にまで拡散するにはもつと時間がかかるので、表面には單一層だけ生成し、それ以上のシリコン酸化物 (SiO<sub>2</sub>) は生成しない。Si 表面は 1 単原子層の硫黄原子で覆われた後に酸化物のパッファー層を形成すると、パッファー層結晶境界の発生を抑える作用もある。

【0042】例えば、スピネル型の酸化物を例にとって説明する。図 3 (b) は、スピネル型の酸化物の単位格子を (001) 面に平行な 8 層に分けて見た原子配列図である。下から第 2、第 4、第 6、第 8 層目は硫黄が 8 個含まれる。Si (100) 面上の同一領域内にも最表面に Si が 8 個存在する。そして最表面の Si は、ダングリングボンドをそれぞれ 2 つずつ持つ。

【0043】硫黄原子も結合手を 2 本持つので、スピネル構造の硫黄原子は丁度、Si のダングリングボンドを結婚することができる。ただし、Si 原子の配列には、90 度ずれて異なる 2 種類がある。よって、それにより第 2、第 6 層目が Si 最表面の直上に来るのか、第 4、第 8 層目が Si 最表面の直上に来るのかが決まる。仮に第 2、あるいは第 6 層目から成長するとする。そのどちらから成長するのかは、2 つが結晶学的に等価であるためそこまでは決まらない。しかし、8 層ある内の 2 層まで最初の成長面が決まることにより、成長面の違うものの間の結晶島がぶつかりあうために発生する結晶境界の発生を抑える作用が幾分あると考えられる。特に酸化物薄膜がペロブスカイト構造の酸化物であれば、強誘電体特性等の特異な特性をもち、酸化物薄膜素子として有用なものが多い。

【0044】

【発明の実施の形態】以下、実施例により本発明の実施の形態を具体的に説明する。

【実施例 1】図 1 は、本発明の一実施例である強誘電体キャバントの模式的断面図である。Si 基板 1 上に、パッファー層 2 として 1% の錳を含む酸化インジウム ( $(In_{0.01}S_{0.99})_2Si$ )、導電層 3 として白金 (以下 Pt と記す)、格子調整層 4 としてルテニウム酸ストロンチウム ( $SrRuO_3$ 、以下 SRO と記す)、強誘電体層 5 としてチタン酸バリウムストロンチウム ( $(Ba_{0.8}Sr_{0.2})_2TiO_3$ 、以下 BSTO と記す)、上部電極 6 として SRO が、この順に積層されている。パッファー層 2、導電層 3、格子調整層 4、強誘電体層 5、上部電極 6 の厚さはいずれも約 100 nm である。

る。

【0045】格子調整層4のSROは導電性であり、また、擬ペロブスカイト立方晶とすると、その格子定数は0.3928nmであり、0.3923nmのPtと0.3952nmのBSTOとを連続的に接続させる作用をする。図1の強誘電体キャバシタの製造方法を以下に詳しく述べる。まず、S1基板1を通常のRCA法で洗浄する。具体的には硫酸(H<sub>2</sub>SO<sub>4</sub>)と過酸化水素水(H<sub>2</sub>O<sub>2</sub>)との混合液、希硫酸(HF)、アンモニア水(NH<sub>4</sub>OH)と過酸化水素水(H<sub>2</sub>O<sub>2</sub>)との混合液、塩酸(HCl)と過酸化水素水(H<sub>2</sub>O<sub>2</sub>)との混合液を用いて順次処理し、水洗する。

【0046】処理後のS1基板1を、スパッタ製膜装置のチャンバーに入れ、 $1 \times 10^{-6}$ Paの真空度のもとでS1基板1を約850°Cに加熱する。その後、基板温度を600°Cに下げ、前記組成のバッファー層2を厚さ100nm製膜する。1%錫(Sn)に置換されたIn:Siは低抵抗となる。引き続きスパッタ製膜装置内で、導電層3のPtを厚さ100nm製膜する。Ptの格子定数は、0.3928nmであり、前記In:Siの格子定数1.0724nmの1/2の更に1/2にほぼ相当する。すなわちPtの[100]方向がIn:Siの[110]方向に平行な原子配列をとるエピタキシャル成長をする。また、PtをIn:Siの上に製膜することで、続く格子調整層4、強誘電体層5、上部電極6の酸化物薄膜の製膜においてもエピタキシャル成長を可能にする。

【0047】次いでスパッタ法により、格子調整層4のSRO膜を100nm製膜する。更に、スパッタ法により、強誘電体層5のBSTO膜を100nm製膜する。その上に、上部電極6として再びSRO膜を100nm製膜する。製膜は、金属膜マスクを用いて選択的におこなっても良いし、或いは製膜後に適当なフォトエッチングを施しても良い。BSTO膜の上下にSRO膜を用いたのは、上記の格子整合の他に、BSTO膜の界面での融解欠損を防ぐ目的もある。

【0048】このようにして、BSTO膜を誘電体とするキャバシタを作製した。S1基板1を下部電極とし、上部電極6との間に電圧を印加して測定したところ、BSTO膜の誘電率として約700の値が得られた。また、0.3MV/cmの電界強度における漏れ電流は、約 $1 \times 10^{-12}$ A/cm<sup>2</sup>であった。

【実施例2】実施例1と同様な製造方法により、バッファー層2としてIn:Siの代わりにInの1%の錫を含むLa:In<sub>0.99</sub>Sn<sub>0.01</sub>Si<sub>0.01</sub>を挟んだ、BSTO膜を誘電体とするキャバシタを作製した。

【0049】S1基板1を下部電極とし、上部電極6との間に電圧を印加して測定したところ、BSTO膜の誘電率として約710の値が得られた。0.3MV/cmの電界強度における漏れ電流は、約 $5 \times 10^{-12}$ A/cm<sup>2</sup>であった。

【実施例3】図2は、本発明の別の実施例の強誘電体キャバシタの模式的断面図である。

【0050】S1基板1上に、バッファー層2として1%の錫を含むCa<sub>(In<sub>0.99</sub>Sn<sub>0.01</sub>)</sub>:Si<sub>0.01</sub>、導電層3としてPt、格子調整層4としてSRO、強誘電体層5としてBSTO、上部電極6としてSROが、この順に積層されている。バッファー層2、導電層3、格子調整層4、強誘電体層5、上部電極6の厚さはいずれも約100nmである。

【0051】格子調整層4のSROは導電性であり、また、擬ペロブスカイト立方晶とすると、その格子定数は0.3928nmであり、0.3923nmのPtと0.3952nmのBSTOとを連続的に接続させる作用をする。図2の強誘電体キャバシタの製造方法を以下に述べる。S1基板を実施例1と同様にRCA洗浄法で洗浄する。

【0052】処理後のS1基板1を、スパッタ製膜装置のS1清浄表面を得るためのチャンバーに入れ、 $1 \times 10^{-6}$ Paの真空度のもとでS1基板1を約800°Cに加熱する。次に硫化物を生成するチャンバーに移送する。 $1 \times 10^{-6}$ Paの硫化ガスでチャンバーを満たし、1分間基板温度800°Cで放置する。その後、基板温度を600°Cに下げ、Ca<sub>(In<sub>0.99</sub>Sn<sub>0.01</sub>)</sub>:Si<sub>0.01</sub>を厚さ100nm製膜する。1%錫(Sn)に置換されたCa<sub>(In<sub>0.99</sub>Sn<sub>0.01</sub>)</sub>:Si<sub>0.01</sub>は低抵抗となる。

【0053】引き続きスパッタ製膜装置内で、導電層3のPtを厚さ100nm製膜する。Ptの格子定数は、0.3923nmであり、Ca<sub>(In<sub>0.99</sub>Sn<sub>0.01</sub>)</sub>:Si<sub>0.01</sub>の格子定数1.0724nmの1/2の更に1/2にほぼ相当する。すなわちPtの[100]方向がCa<sub>(In<sub>0.99</sub>Sn<sub>0.01</sub>)</sub>:Si<sub>0.01</sub>の[110]方向に平行な原子配列をとるエピタキシャル成長をする。また、PtをCa<sub>(In<sub>0.99</sub>Sn<sub>0.01</sub>)</sub>:Si<sub>0.01</sub>の上に製膜することで、続く格子調整層4、強誘電体層5の酸化物薄膜の製膜においてもエピタキシャル成長を可能にする。Ca<sub>(In<sub>0.99</sub>Sn<sub>0.01</sub>)</sub>:Si<sub>0.01</sub>は幾分酸化されてCa<sub>(In<sub>0.99</sub>Sn<sub>0.01</sub>)</sub>:O<sub>0.01</sub>に変化し、格子定数の変化を起こすが、Ptの結晶性には影響を及ぼさない。

【0054】次いでスパッタ法により、格子調整層4のSRO膜を100nm製膜する。SRO膜の格子定数は擬立方晶とすると0.3928nmであり、Ptとマッチする。更に、スパッタ法により、強誘電体層5のBSTO膜を100nm製膜する。BSTOの格子定数は0.395nmであり、これもSRO膜とマッチする。その上に、上部電極6として再びSRO膜を100nm製膜する。BSTO膜の上下にSRO膜を用いたのは、上記の格子整合の他に、BSTO膜の界面での融解欠損を防ぐ目的もある。

【0055】製膜は、金属膜マスクを用いて選択的におこなっても良いし、或いは製膜後に適当なフォトエッチ

ングを施しても良い。このようにして、BSTO膜を誘電体とするキャパシタを作製した。S1基板1を下部電極とし、上部電極6との間に電圧を印加して測定したところ、BSTO膜の誘電率として約750の値が得られた。0.3MV/cmの電界強度における漏れ電流は、約 $2 \times 10^{-7} \text{ A/cm}^2$ であった。S1基板表面の硫黄封壠化処理をおこなったことにより、炭素汚染が無く良質のエビタキシャル膜が成長したためと考えられる。酸化物薄膜電子としては、ここに記したキャパシタの他に、高温超伝導体薄膜の製膜にも有効と考えられる。

## 【0058】

【発明の効果】以上説明したように本発明によれば、バッファー層として金属硫化物を介在させて結晶性の良い酸化物薄膜をエビタキシャル成長させることにより、シリコン単結晶基板上に酸化物薄膜電子を構成することができた。特に、 $(\text{M}_{1-\text{x}}\text{In}_{\text{x}})_2\text{S}_3$ 型や $\text{MIn}_2\text{S}_4$ 型の金属硫化物のようなインジウムを含む金属硫化

物、硫化マグネシウム、硫化カルシウム、硫化マンガン等の導電性の硫化物を用いれば、入手の容易なシリコン単結晶基板を下部電極として利用でき、酸化物薄膜電子の適用範囲が段階に広がり、一層の普及を可能ならしめるであろう。

## 【図面の簡単な説明】

【図1】本発明にかかる酸化物薄膜電子の断面図。

【図2】本発明にかかる別の酸化物薄膜電子の断面図。

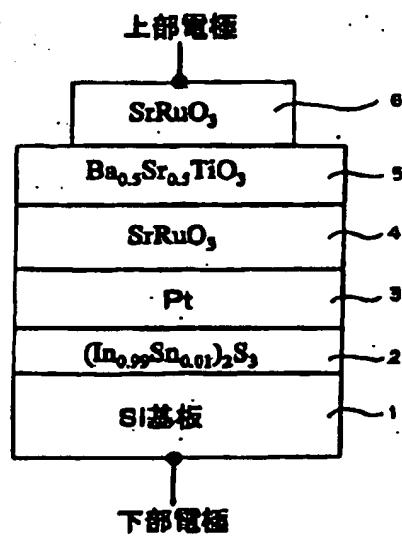
【図3】(a)はスピネル構造の単位格子、(b)は

(001)面に平行な8層の原子配列図。

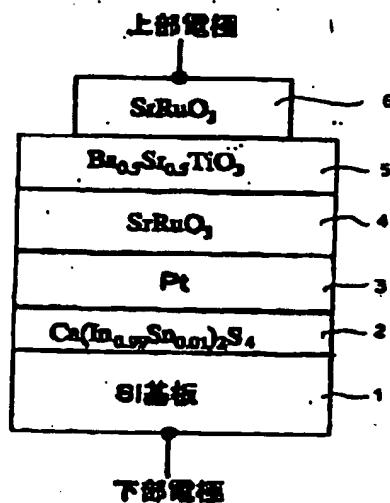
## 【符号の説明】

- 1 S1基板
- 2 バッファー層
- 3 塩電層
- 4 格子調整層
- 5 電界電極層
- 6 上部電極

【図1】



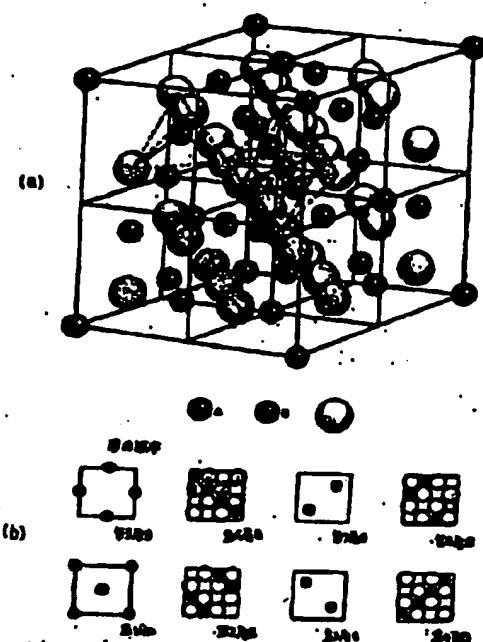
【図2】



(b)

特開2002-3297

(図3)



BEST AVAILABLE COPY

**This Page is Inserted by IFW Indexing and Scanning  
Operations and is not part of the Official Record**

**BEST AVAILABLE IMAGES**

Defective images within this document are accurate representations of the original documents submitted by the applicant.

Defects in the images include but are not limited to the items checked:

- BLACK BORDERS**
- IMAGE CUT OFF AT TOP, BOTTOM OR SIDES**
- FADED TEXT OR DRAWING**
- BLURRED OR ILLEGIBLE TEXT OR DRAWING**
- SKEWED/SLANTED IMAGES**
- COLOR OR BLACK AND WHITE PHOTOGRAPHS**
- GRAY SCALE DOCUMENTS**
- LINES OR MARKS ON ORIGINAL DOCUMENT**
- REFERENCE(S) OR EXHIBIT(S) SUBMITTED ARE POOR QUALITY**
- OTHER:** \_\_\_\_\_

**IMAGES ARE BEST AVAILABLE COPY.**

**As rescanning these documents will not correct the image problems checked, please do not report these problems to the IFW Image Problem Mailbox.**